
電話

伊東歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電話

【Nコード】

N9878L

【作者名】

伊東歩

【あらすじ】

夜中にかかってきた一本の電話。その相手は、未来からかけた私の子供だという。

R R R . .

「ん、ん。何よこんな夜中に、2時半？」

R R R . .

「も、はいもしも？」

「もしもし、綾野加奈子さんですか？」

「そうですよ。こんな夜中に何の用？」

「あ、そっちは夜中なんだ。申し訳ない。」

「そっちはって、国際電話でも掛けてるの？」

「いや、日本だよ。こっちは昼間だけ。」

「へ、最近是国内でも時差があるのね。勉強になったわ。じゃあさよなら。」

「ちょちょ、待って待って！」

「あのね、いた電するにはちょっと遅すぎるんじゃないの？」

「違うよ、いた電じゃない。聞いて欲しいことがあるんだ。」

「こんな夜中に？」

「それは本当に申し訳ない。」

「申し訳ないと思うなら切っていい？」

「いきなりで悪いけど聞いて。実は、」

「実は、何？」

「実は、お願いがある。子供を、堕ろして欲しいんだ。」

「あら、素敵な言葉。検討します。じゃあね。」

「待つて待つて！」

「あのね、いたずらでももうちょっと考えてやったら？もしくはリサーチするとかさ。私は妊娠はもちろ

ん、結婚もしてないの。それでなにを堕ろせてのよ。」

「それは分かってる。」

「あ、そ。じゃあもう満足かしら？」

「だからいたずらじゃないんだってば。今付き合っで長い彼氏がいるでしょう？」

「ああ、賢ちゃん。」

「そう、その人と結婚するんだ。妊娠を機に。」

「出来ちゃった結婚？別にいいけど予告されるとなんか微妙ね。」

「そして俺が産まれた。」

「・・・は？ごめん、よく聞こえなかったわ。何て？」

「だから、俺はあなたの子供なんだよ。そっちから見ればいわゆる未来から掛けてるってことになる。」

「・・・もう3時前だわ。そろそろいいかしら？」

「待ってくれよ。切られたらきつともう二度と繋がらない。今こうして話せること自体奇跡みたいなもんなんだから。」

「そりゃあ、君が本当に私の子供だったら、この電話は奇跡以外の何ものでもないわね。」

「まあ信じてくれて方が無理だと思う。でもとりあえず電話は切らずに話を聞いて欲しいんだ。」

「はあ。まあ幸い明日は休みだし、ちょっとくらいは付き合ったげる。あとで変に恨まれてもイヤだし。」

「よかった。」

「で、さっきも言ってたわね、子供を堕ろしてくれて。どういう意味？」

「そのままの意味だ。あなたが結婚する一つのきっかけとなった妊娠、それはいい。でも、その子を産ん
じやいけないんだ。」

「意味分かんないんだけど。何で産んじやだめなのよ？出来ちゃった結婚しました、でも子供は墮ろしま
すって？笑えないジョークね。」

「死んじやうんだ。」

「え？」

「あなたは、その子供を生んだ直後、息を引き取る。」

「・・・出産で命を落としちゃうほどヤワじゃないつもりだけど？」

「そうとうな難産だったって聞してる。何十時間も掛かって、母子
ともに危険な状態までいって。命から
がら子供だけ助かった。」

「忠告ありがとう、気をつけるわ。」

「ちゃんと聞いてくれ、母さん。」

「母さんは止めて。まだ妊娠すらしてないっての。」

「ああ、そうか。」

「ちょっと待ってよ、君さっき私の子供だって名乗ったわよね。っ

てことは、墮ろしてくれっていう子供
って。」

「俺だよ。俺を墮ろしてほしいんだ。」

「俺を墮ろせって、変なセリフ。」

「そうすればあなたは死ななくてすむ。」

「なんで自分を墮ろさせてまで助けようとするの?」

「俺は、母さんが好きだ。」

「産まれてまもなく死んだ母が好きって?」

「父さんが家にたくさん母さんの写真を飾ってた。ビデオもよく観
せてくれたよ。子供の俺が言うのも変
だけど、母さんは明るくて、いつも笑っていて、とても綺麗だった。
父さんはよく母さんの話をしてくれ
た。」

「君の話を信用するなら、お父さんて賢ちゃんのことね。」

「そう、ビデオでもそう呼んでたね。」

「そっか、賢ちゃんは私の話をしてたか。よし、明日褒めてやろう
っと。そっか、水を差すようで悪いけ
ど、一ついいかしら?」

「何?」

「賢ちゃんはお父さんは今近くにいないの？変わってくれば君の話を信用してあげられると思うんだけどなあ。」

「そうだね、是非僕も変わってあげたい。父さん喜んだらうし。でも、もう無理だ。父さんは、もうこの世にはいない。」

「え、賢ちゃんが？何でよ？事故か何か？」

「一年半くらい経つかな？過労で、倒れた。」

「過労？あの賢ちゃんが？まさか、こう言っちゃなんだけど、あんまり自分に厳しい人間じゃないよ、彼。」

「俺は昔の父さんは知らない。俺が知る父さんはいつも良い父親で、家のことも、炊事洗濯もちゃんとこなす良い母親でもあった。」

「あの賢ちゃんがねえ。どうも信じがたいわ。」

「今は信じられなくても仕方ないと思う。でも、いつかは分かって欲しい。俺が産まれてしまう前に。父さんはよくお礼を言っていた。俺がちょっと手伝いをしただけでもすごく褒めてくれた。そして何度もありがとって言ってくれた。俺はそんな父さんが好きだった。だから、父さんに死んでしまうほどの苦労をかけたくないんだ。そのためには、母さんが生きてなきゃ駄目

なんだよ。だから、母さんが生きるために、俺を産まないでくれ。お願いだ。」

「お父さんは、最期に何か言っていた？」

「死に目には立ち会えなかった。連絡があつてすぐ駆けつけたけど・」

「・・・私もさあ、幼くしてお母さんと死別してんだよね。」

「知ってる。」

「そう。それでね、母の愛つてものをよく分らないまま育つた。

お父さんにいつか聞いたんだよね。お

母さんて昔から体が弱かったんだって。出産は難しいでしょうつてお医者さんから言われてたらしい。

でも、お母さんは私を産んだ。そのせいで死期を早めちゃったんだろうね。別にお父さんは私を責めるつ

もりでこんなことを言っただんじやないと思う。でも、実際、私にはその話は重荷以外の何物でもなかった。

た。自分のせいで母は死んでしまったんだって、ずっと、それこそ10年以上そう思ってた。」

「・・・俺と一緒にだ。」

「そっか、君も重荷に感じてるんだ。そうよね、子供からしてみればそんなのお涙ちょうだいの良いお話

なんて思えるはずないよね。私が覚えてるお母さんって、いつも床に伏せて、時々乾いた咳をして、そん

な苦しそうなイメージしか残ってなかった。親元を離れて5年くら

い経った頃かな？休暇で久しぶりに実家に帰ったの。その時、掃除してたらこれが出てきたって、お父さんが一冊の日記を出してきたの。小さい頃見た記憶があるそれは、弱ってたお母さんがお父さんに頼んで買ってきてもらった日記だった。最期だからってすごい上等なものを頼むって言われてさ、お父さんは懐かしそうに呟いた。確かに、十何年も経ってるのにその日記は全然色あせてなくて、しっかりしてた。」

「・・・その日記には何て？」

「毎ページに細かい字でびっしり書いてたよ。って言ってもまあほとんど寝たきりみたいな生活だし内容はお父さんに対する感謝とか、私が元気で育ってくれて嬉しい、みたいなことばかりだった。でね、それをぱらぱら捲ってたら、あるページで、手が止まった。今まで綺麗な字で埋め尽くされてたそれが、不意になくなったの。まあ、つまり、その日に亡くなっちゃったってことなんだよね。その最期のページには、前のとは比べ物にならないほど、震えた、乱れた字で、一言『正樹さん、加奈子、ありがとう』って。」

「あ、ありがとう・・・？」

「そう、まあ、お父さんは分かるよ。毎昼毎夜看病してさ、感謝されるのはもちろんのことだと思う。でもお母さんは私にもありがとって。何もしてないのにさ。私の名前書かなきゃもっと綺麗な字でお父さんに感謝の言葉書けただろうに。何してんのよ、無理しないでよ、

そんなこと思った。その後慌てて日記を閉じたよ。涙で滲ませちゃいけないって。私のせいで母さんが死んでしまったなんて重荷はいつの間にか感じなくなってた。」

「・・・父さん、最期に看護婦さんに俺宛の伝言を残してた。」

「何て？」

「『母さんも言ってた』って。」

「母さんも？」

「父さんはよく本を読んだ。だからきつとかっこつけて、回りくどい言い方したんだ。さっき言っただろ？父さんはよく俺にありがとって言ってたって。母さんもそう言ってたって、俺に言いたかったんだ。」

「そっか。私、言えたんだ、わが子にありがとって。まあ君の話を信用すれば、って話だけどね、ふふ。」

「その笑い方、ビデオでよく見た。俺好きだよ。母さんのその笑い方。」

「母さんは止めてってば。信用したとは言っていないよ。でもさ、君もそれを聞いたんなら、はじめから思ってたんじゃないの？墮ろしてくれなんて言っても、母親の気持ちは変えられないって。」

「・・・もしかしたら、声が聞きたかっただけかも。でもちよつとでも俺の話を聞いて欲しかったんだ。」

「そっか。」

「そろそろ切るよ。夜中にごめんね、それじゃあ。」

「うん、じゃあね。おやすみ。それと、ありがとう。」

「・・・その言葉、直接聞けてよかった。じゃあ、おやすみなさい。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9878/>

電話

2010年12月8日15時30分発行